

【一】 次の文章をよく読み、後の設問に答えなさい。

こんな問題を聞いたことがあるだろうか。

あるクレタ島人が、「すべてのクレタ島人は嘘つきである」と言った。さて彼の言うことは「本当」だろうか、それとも「嘘」だろうか。

これはギリシャのエピメニデスという人物の言葉によるパラドクス（逆説、背理）で、論理的には、「ウソだ」という答えも「本当だ」という答えも成り立たないとされている。なぜだろうか。

まず、このクレタ島人は「嘘つき」であると答えるとする。すると彼の言葉は嘘なので、「すべてのクレタ島人は嘘つきでない」が正しいことになるが、ところが彼の言葉は「嘘」なのだから事実と反する。逆に、もしこのクレタ島人が嘘つきでないとすると、彼の「すべてのクレタ島人は嘘つきである」は真実ということになるが、するとやはり彼は嘘つきでないということと矛盾する。いったい、これはどう考えればいいのか。

「中略」

この問題の「うーむ、どう考えればいいのか」と人の頭を悩ませる中心点、つまり、この問題が難問（アポリア）になっている根本の理由は、われわれが、誰かの言葉は「ほんとう」か「うそ」かのどちらかだと思いついて、という点にある。ラッセルという哲学者も典型的にこの考え方にはまりこんで、これを解けない難問と考えてしまったのだ。

人の言うことは、すべて「ほんとうか嘘か」のどちらかだろうか。もちろんそんなことはない。例えば「私は二〇歳です」という言葉は、事実にかかわっているから、彼がじつは二〇歳でなく二一歳だったなら「嘘」ということになりうる（この場合も、彼がわざと欺くつもりで言ったのでなければ、単なる「思い違い」だということも可能だが）。

「明日は晴れだよ」といった場合はどうか。これは「事実」にかかわるといふより、予想あるいは意見なので、直接真偽には関係しないとされる。さらに、「人の人生は短い」はもっと真偽に関係なくなる。だから、すべての言葉が「ほんとう」か「うそ」かのどちらかだとは言えない。このことは誰にも分かるだろう。

ところが、クレタ島人の話では、その発言はたしかに「事実」に関する言葉のように見える。事実に関する言表は「真偽」のいずれかであるとすれば、この言葉も「ほんとう」か「うそ」かのどちらかであるはずだ、と考えてよいことになる。しかしもっと注意して考えてみよう。

仮に読者である君がクレタ島に行き、一人のクレタ島の住人に「クレタ島人はみんな嘘つきだよ」と言われたとする。これは一応事実に関することだと言える。しかしそのとき君は、彼の言うことは「ほんとう」か「うそ」かのどちらかだ、と考えるだろうか。決して、そんなことはない。

君はどう考えるか。「この人は何を言いたいのだろうか、この島には観光客目当てにごまかしたり、ちよるまかしたりする商売人が多いので、親切心で警告してくれているのだろうか。それとも、なにかむしやくしやくすることでもあって、自分の島の人間の悪口でもいいたいのだろうか。」他の可能性もあるが、まずそんな風に考えるだろう。

それだけではない。仮に君がきわめて真面目な性格で、彼が「ほんとう」を言っているとそのまま受け取ったとして、しかしそのとき君は、彼が「クレタ島人はみんな嘘つきである」と言う以上、クレタ島人はあらゆる機会に、つねに必ず嘘をつく、と考えるだろうか。さらに、そうである以上彼がいま言っていることもまた嘘だということになる、と考えるだろうか。もしそう考えたら、君は、何かの具合で頭のネジが外れてしまっているのだ。

要するに、現実の言語では、あるクレタ島人が「すべてのクレタ島人は嘘つきである」と言ったとして、実際に

ここにいわれているようなアポリアやパラドクスを受けとって困るような人は、人もいないのだ。この問いが、パラドクスやアポリアと感ぜられるとしたら、実際多くの人がそう感ぜるわけだが、それは、実際の言語の使用では決して起こらないあることが、起こるかのように錯覚するからである。つまりこれは、三次元（立体的）のものを二次元（平面）で表現することで作り出されるエッシャーの騙し絵のようなもので、問題は、この錯覚を指摘することによって解明されるのだ。

さきにも言ったように、この問題は全体として言語や論理の「本質」ということにかかわっている。だからていねいに説明するにはかなり多くのことを言わなくてはならないが、できるだけポイントをしばって言ってみよう。肝心なのは、実際にこういう場面にぶつかつたとしてもわれわれは何も問題を感じないが、なぜそれをこうして文章にして示すと、見たようなパラドクスが生じるのか、という点だ。要するに、ここで文章として分析される言語と、実際われわれが使っている言語では、言語の機能が違っている。どこが違っているのか。核心点は一つである。

実際の言語では、われわれはまず、A、をつかもうとして聞いている。それが実際の言語の構造上の本質である。ところが、問題にされているような文章として示された言語では、われわれはその文章が「一般的に表示している意味」しかつかむことができない。ここに錯覚の根がある。

英語のパラドクスで、「what's the difference?」というのがある。これは「違いは何だ?」という意味と、「何の違いもない」という二つの意味をもっていて、ただ書かれているだけだとその意味は「決定不可能」だとされる。これも同じで、実際の場面でだれかがこの言葉を使った場合、たいていはどちらの意味で言ったか理解できる。聞き手は、彼が何を言おうとしたのかをめぐり、それは推測でほとんどの場合分かるからだ。ところがここに「what's the difference?」という言葉があります、という具合にこれを出すと、ここではB がない。それで「彼がどんなつもりで言ったのか」というねらいは消え、さきの二通りの一般的意味だけが残る。そのため意味は決定不可能になるのである。あるクレタ島人が「すべてのクレタ島人は嘘つきである」と言った、というのと同じ事情である。

まとめると、現実の言語では、われわれは必ず「B の意」をつかもうとしており（このクレタ島人は何を言いたいのかな?）、そこでは何の問題も起こらない。しかし一般的文章として分析された言葉では、「B の意」は消えてしまい「一般的な意味」だけが現われる。この二つを混同することで、クレタ島人の「話」は奇妙な謎となるのである。

竹田青嗣『哲学ってなんだ』（岩波ジュニア新書、二〇〇二年十一月）

問一 傍線部1について、「誰かの言葉は「ほんとう」か「うそ」かのどちらかだ」という思い込みは、ある言語の性質を私たちが捉え切れないことによって生じている。その性質とは何か。それを説明した次の文が完成するように、二箇所に当てはまる言葉を、本文の後半の内容を踏まえて、それぞれ十字程度で考えて書きなさい。

と は、その機能が違うということ。

（順不同）

問二 傍線部2「さらに、「人の人生は短い」はもっと真偽に関係なくなる」について、なぜそのように言えるのか。三十字以内で説明しなさい。（句読点などの記号や空白も字数に含む）

問三 傍線部3について、筆者は結局ここで何を言おうとしているのか。最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 初めて訪れた場所では、現地の人の言いたいことに十分注意しなければ、裏をかかれてしまうということ。
- イ 親切心には警戒が必要だということ。
- ウ 円滑なコミュニケーションは文脈の解釈によって成立しているということ。
- エ 感情的な発言は、事実であっても相手に伝わらないことがあるということ。

問四 空欄 A に入る言葉として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア しゃべっている人がその言葉でいったい何を言おうとしているのか
- イ 相手が自分に対して攻撃的になっていないかどうか
- ウ 自分なら同じことをどのような言葉づかいで言うか
- エ パラドクスがどのように発生しているか

問五 後半にある三箇所の空欄 B には、すべて同じ言葉が入る。空欄 B に最もふさわしい言葉を選び、本文の内容を踏まえて、五字以内で考えて書きなさい。

【二】次の文章をよく読み、後の設問に答えなさい。

現代人は常日頃、様々なメディアに触れている。テレビ、新聞、ラジオ、雑誌、書籍、ポスター、パソコン、ケータイ、映画、手紙、標識、電光掲示板。数多くのメディアを使いこなすことで、情報を管理し、状況を判断し、人と交流し、目的を果たし、娯楽を享受し、様々な利便を得ている。それと同時に、メディアを通じて、メディアそのものについても頻繁に語り合っている。

多くのの人にとってメディアは、自分たちのコミュニケーションをサポートするためのアイテムとして、以前まで感じていた不便を乗り越えることを可能にするものだ。新しいメディアが登場することは、私たちの生活を楽にしてくれる、わくわくするような出来事であるに違いない。そこで、それらをクシするイノベーター（革新的採用者）たちは、「メディアがいかに有益なものであるか」と喧伝する。

しかし同時に多くの人にとってメディアは、私たちが慣れ親しんできた風景を変え、自分よりも軽薄な若い世代、あるいは自分が認めたくはない人々に対して優位性を与えてしまうものでもある。新しいメディアが登場することは、私たちの安定した世界観をぶち壊す、面倒を持ち込むとんでもない出来事であるに違いない。そこで、キュウライのメディアを愛し新しいメディアを嫌うラガード（遅延者）たちは、「新しいメディアがいかに有害なものであるか」と喧伝する。

このようにして私たちの社会では、新しいメディア（ニューメディア）が登場すると、必ずと言っていいほど「有

害メディア論」（メディアバッシング、メディア悪玉論）が観られることになる。「有害メディア論」とは、ニューメディアの影響力を過剰に高く見積もったうえで、「ニューメディアが（自分以外の）人々に有害な影響をもたらす」とする「流言」のパターンだ。

「若者がケータイによってサルに退化した」「ゲームによって脳が汚染される」などなど、その時代の「科学的と思われている用語」によってもっともらしい説明が施されていく、例のアレ。その《過剰に見積もられた影響力》への懸念は、特に身体的にも精神的にも未成熟な者（女・子ども）に対する「第三者（父）からの心配」を装って、あたかも客観的で知的な議論であるかのように指摘されるため、時に実体を置き去りにし、センセイ化し、いつしか社会にゆるやかに広がっていく。

「流言」とは、事実かどうかは非常にあいまいな情報が、その根拠が特定されないまま、人々の必要を満たすために広がる現象を指す。発話者の作為性（意図）が問題にされやすい、誤った情報である「デマ」と違い、その流言の「元ネタ」を作った人、流した人の意図などを分析しても、そのケントウを終えることができない。流言は、時間の経過と共に、新たな文言や要素が書き加えられたり、逆にその骨組みだけにそぎ落とされたりしながら、口から口へ、チャンネルからチャンネルへと飛び交うことを止めない。それが人々の必要を満たす限り、流言はいつまでも再生産され続けていくからだ。

いま筆者は、「流言は人々の必要を満たす」と言った。一般的な流言研究では、社会的な不安が蔓延したり、パニックに陥った場合、「どうしてこんなことになったのか」ということについて、今までの自分の経験や知識、あるいは認知の仕方と整合するような何か適当な「A」が必要になると説明される。そして情報不足や選択の困難によってそうした「A」がうまく得られないときに、認知的不協和を解消するための言説として導入されるものが「流言」だとされている。つまり、オオゼイオオの人の集合的な不安が生じたときに、人々が協力して「わかりやすい敵」「具体化された恐怖」「都合のいい現実」を作り出す社会的な機能をもった現象だというわけだ。

流言研究の祖であるオルポートとポストマンは、「流言＝重要さ×曖昧さ」という有名な公式をあらわしている。だが、この公式だけでは、「なぜ流言は、ある種のパターンを反復するのか」という問いを解くことができない。そこで、似かよった流言が歴史的に反復する理由を考察するために、まずは流言の利点に目を向けてみよう。

流言が人々に支持されるためには、「確からしさ」だけでなく、それなりのメリットが必要となる。また、流言の拡散に参加する人は、最初の一人を除いて、聞き手から語り手に回るという体験をすることになる。だから、流言が広がる際には、その情報を取得する行為自体の「必要性」だけでなく、情報を共有したり話したりすることによってもたらされる利益、そして、そうした行為そのものの快楽が重要となる。

荻上チキ『社会的な身体——振る舞い・運動・お笑い・ゲーム』（講談社現代新書、二〇〇九年六月）

問一 傍線部ア～オのカタカナを、適切な漢字に直しなさい。

問二 点線部 a 「イノベーター（革新的採用者）」と点線部 b 「ラガード（遅延者）」のそれぞれについて説明した次の文が完成するように、それぞれにとってニューメディアがどのような存在であるかを示す箇所を、本文中からそれぞれ二十五字以内で抜き出して書きなさい。

- a イノベーターにとってニューメディアは、
有益なものであるである。
- b ラガードにとってニューメディアは、
有害なものであるである。

問三 二箇所ある空欄 A には、同じ言葉が入る。 A に入る言葉として最も適切なものを一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 言語化 イ 合理化 ウ 形骸化 エ 抽象化 オ 具体化

問四 筆者はこの文章において、「有害メディア論」のどのような点に問題があると考えているか。その説明として、最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「有害メディア論」は、新たなデジタルメディアの開発の速度を遅らしてしまうということ。
イ 「有害メディア論」は、根拠があいまいな情報が、私たちの不安にもなって次々と拡散されていくことによつて成立しているということ。
ウ 「有害メディア論」は、新しいメディアの影響力をあまりに低く見積もっているということ。
エ 「有害メディア論」は、ニューメディアがもたらす幼い子どもたちへの悪影響ばかりを重視し、ニューメディアが持つ大人にとつてのメリットを無視しているということ。

問五 筆者はこの文章において、新しいメディアが登場するたびに似たような「有害メディア論」が「流言」として繰り返されると指摘している。なぜ筆者がそのように「流言」が繰り返されると考えているのかということについて、四十文字以内で説明しなさい。その際、人々がどのようなときに「流言」を必要とするのかに注意すること。（句読点などの記号や空白も字数に含む）